建築まちづくり委員会

まち歩きから千葉の街を捉える

―地域を活かす建築家のファシリテーション―

連（むらじ）　健夫
JIAまちづくり会議
副議長

松村哲志
建築まちづくり委員会
委員長

JIA建築家大会2025千葉において、JIAまちづくり会議、関東甲信越支部・建築まちづくり委員会、日本建築まちづくり適正支援機構（JCAABE）との協働で、JIAマンス企画でのオンラインシンポジウムと本大会でのまち歩きワークショップを実施しました。今回は、本大会のまちづくり系トークセッションS02「千葉のまちの真ん中をデザインする」があり、その準備を半年前から行い、市民活動家や行政と情報交換をする中で、千葉の現状理解を含め、議論の下地を作ることができました。千葉市では、ウォーカブルなまちづくりを推し進めているとともに、「市民自治によるまちづくり条例」によるまちづくり方針があり、その特徴と課題も浮き彫りになりました。

グランドレベルはプライベートとパブリックの交差点

大会に先立ち行われたJIAマンスのオンライン企画として、10月3日㈮に「グランドレベルで千葉市のまちづくりを考える／地域を活かす建築家のファシリテーション」をテーマにシンポジウムを開催しました。

建築コミュニケーターの田中元子氏からは、喫茶ランドリーで生じているさまざまな出来事や出会いの紹介とともに、建築体操→パーソナル屋台→アーバンキャンプ→東京ベンチプロジェクトなどが説明されました。グランドレベルはプライベートとパブリックの交差点であり、人口が少なくなったとしても街に人がいることを可視化することが大切、人はベンチに座ると何かをしている、それが街を優しくしている、などが指摘されました。

千葉市まちづくり課の長島哲治課長からは、千葉市が推進する「ウォーカブルなまちづくり」について、自動車から人を中心にした街を目指し、**歩きたくなる街づくりの中で市民の健康や交流に役立てたい**、中央公園プロムナードではパレットテラスを設置し、人がたたずめる場を作っています。また、空き家活用などさまざまな課題があり、建築家がもっとまちづくりに参加してもらいたいとのメッセージがありました。

グランドレベルにある喫茶ランドリー

喫茶の中にランドリーがある

田島則行氏（千葉工業大学教授）からは、大規模ショッピングセンターの問題として、ただ人が集まってもコミュニティーは生まれない、**日常の延長の中で人の繋がりが生まれ、それが良好なコミュニティーになる、その意味で、グランドレベルとウォーカブルは大切なキーワードである**とのコメントがありました。

筆者からはデザインができる建築家がもっとまちづくりに関わる必要があるが、それは上から目線ではなく、市民の目で街を捉えることが大切である、赤坂のまちづくり協議会や東日本大震災における復興まちづくり、カイロ旧市街の保存まちづくりの事例を通して、**人と人を繋ぐファシリテーション能力の必要性**を説明しました。

ディスカッションの中で、デンマーク・オーフス市で暗渠になっていたオーフス川を復活させることにより、街が活性化した事例が紹介され、**歴史の再生行為が人の賑わいを生むというデザインの重要性**が浮き彫りになりました。グランドレベルは大切で、そこをうまくデザインすることによりパブリックとプライベートをオーバーラップさせることが可能となります。それには専門家がファシリテーター（調停者・促進者）として市民と行政を繋ぐ役割が大切、ということが共有されました。

（連 健夫）

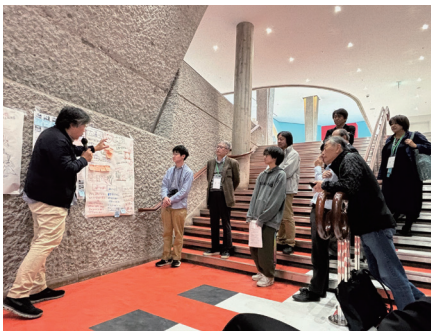
まち歩きワークショップ ―これから続く種まきを意識して―

大会1日目の11月7日㈮、まちづくりワークショップ「まち歩き　千葉の「たから」と「あら」を考え、提案しよう！」を開催しました。

ワークショップに先立ち準備する事項として、まち歩きのルート設定があります。ルートは大切であり、ワークショップの成功を握る鍵です。大切なことは、住民・市民の目線に立って情報を集め、今、必要とされていることを専門家として理解し、設定することです。今回は建築家大会に向けての準備を地域との繋がりを大切にしている大会実行委員会、そして何より普段から地域と連

「たから」「あら」を集めるまち歩き

ディスカッション・提案　まとめ作業


グループ発表と講評

携して活動しているJIA千葉地域会の皆様の情報とネットワークがルートづくりの大きな手助けとなりました。行政の方、地元建築家、委員会メンバーなど幅広い人から意見をいただきましたが、その中に印象的なものがありました。**「大会は今年だけ、まちづくりは続いていく」**という言葉です。まち歩きが次に繋がっていく一つの“小さなフック”となるよう、住民目線を大切に幅広い意見を聞くことを心がけました。

当日は千葉駅に集合。3ルートに分かれ、前半はまち歩き。千葉駅から大会会場までの道のり、官庁街を抜けて辿り着く表の顔ルート①。その左右、JRに挟まれ、川、モノレールなどが走り、古くからの繁華街ルート②。千葉中央駅を含み飲食店などが広がるルート③。それぞれ、まちの「たから」「あら」を集め、グループディスカッション・提案を行う大会会場千葉県文化会館に辿り着きました。

後半のグループディスカッションがスタート。みなさん真剣ですがどこか楽しそうに「たから」を活かす、「あら」を改善する提案をまとめ、発表を行い、まとめの提案を千葉市まちづくり課にお渡しし、大盛況のうちにワークショップを終えました。

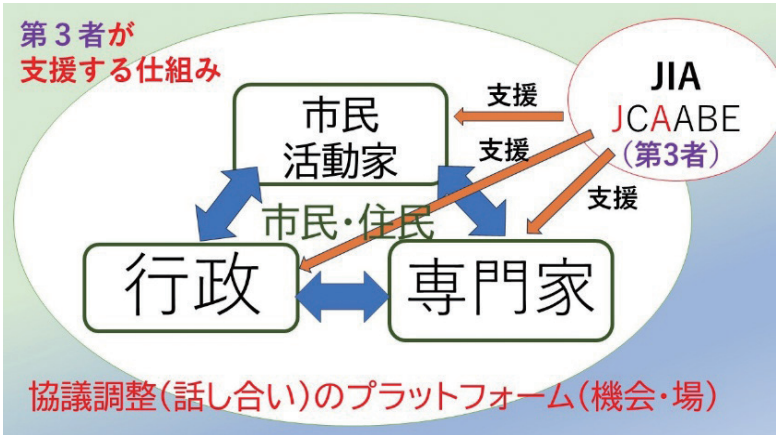
今回の参加者には地元、千葉工業大学の学生やこの地域で実際にまちづくり活動を行うプレイヤーの方も参加していただきました。JIAは多くの地域で活動する建築家が在籍します。その繋がりこそがこれから続くまちづくりへの種まきになると強く感じるまち歩きワークショップとなりました。（松村哲志）

大ホールでのS02「千葉のまちの真ん中をデザインする」

大会2日目の11月8日㈯にはトークセッションS02「千葉のまちの真ん中をデザインする」を開催。千葉市のまちづくりの現状をJIA千葉地域会の飯沼竹一氏、千葉市大木戸孝也課長から説明された後、市民活動家（田中章さん、須藤雅之さん、田野恵さん、明里さん）から、千葉中央公園のイベントを通して見えた課題、道路を歩行者天国にして街路の活性化を図る中で感じるコミュニティーの大切さ、子ども食堂を実施する中で求められる行政支援、以前歓楽街であったところの再解釈や楽しみ方の紹介がありました。松浦健治郎氏（千葉大学准教授）からは、千葉の中心を流れる葭川（よしかわ）をグランドレベルと繋げる「ヨシカワリバーアクション」の報告がありました。

ディスカッションでは、行政、市民活動家、専門家、教育機関の関係性、さらにはJIAやJCAABEなど第三者の専門家団体からの支援も含め、一般の市民が定期的にまちづくりについて話し合うことができるプラットフォームの必要性が指摘されました。千葉市には「市民自治によるまちづくり条例」という素晴らしい枠組みがありますが、それを活かすにはプラットフォームづくりが大切で、それが神谷俊一市長からの挨拶で共有できたことは大切な成果です。これも柳田富士男氏や寺川典秀氏を含めたJIA千葉地域会メンバーの事前努力があったからであり感謝する次第です。（連 健夫）

まち歩きのルートマップ



協議調整のプラットフォームの必要性